

# 天若日子神話の研究

長崎大学大学院生産科学研究科  
賀 南

天若日子の神話について、従来の研究では、射日神話とはあまり結びつけて考えられて来なかった。むしろ、天若日子神話と外国神話との比較が多く見られ、メソポタミアやヨーロッパのそれと比べるのが主流で、中国や朝鮮の神話との比較は意外と少ない。興味深いことには中国の羿の神話と西方の神話との比較研究も盛んであるが、今まで日本神話との比較は須佐之男の神話との比較に限られている。この両神話ともメソポタミアからの伝来したものである可能性も除外できない。しかし、射日神話というアジアに普遍存在する神話的発想として、両者の比較は可能であると考えられる。

本論では、文献照合に加え、日中両国の考古学や民俗学の研究成果も参考にし、天若日子神話と中国の羿の射日神話における太陽神、樹木、弓矢、鳥の組み合わせ及びそれぞれの役割を考察し、天若日子神話に、古くからの射日神話の形跡が残っているかどうかを種々の観点から検討したい。

各章の概要は以下の通りである。

序章「問題の所在」は、天若日子神話に関する先行論の成果と問題点を述べた上、本論における考察は、現存の記紀文本における天若日子神話を解釈し、この神話の存在する意義を究明する立場をとり、あわせて、研究方法と研究範囲も明らかにした。

第一章「天若日子神話の解釈」は、主に記紀に見える各所伝の本文の校合を行い、天若日子の神格、この神話に対する解釈などに関する諸説を踏まえながら、考察を行った。その結果として、天若日子は元来、天降り伝承を持っていて、その根本的な神格は太陽神であること、今まで定説とされてきた「ニムロッドの矢」伝承とこの神話の結び付きには無理があることや、天若日子神話は王権神話の性格を有し、アマテラス・高木神との争いと見なすべきであることなどの結論に至った。

第二章「天若日子と羿の神話との比較」は、中国古代文献に散見している羿に関する神話の概要を整理し、それを天若日子神話の構造と比較したところ、相違点も見られつつ、多くの共通点が読み取れた。

第三章「天若日子神話における射日的要素」は、前章の比較に加え、考古学、民俗学などの成果も参考にした結果、天若日子神話と中国の羿の射日神話とは、太陽神、樹木、弓矢、鳥の組み合わせ及び役割が類似することが多く、構造上いずれも大きくアジア諸国全般に見られる射日神話のモチーフに属していると考えた。

第四章「天若日子神話における雉の意義」は、日中文献における雉のイメージを考察した結果、天若日子神話の中に登場する雉も、太陽象徴としての性格を十分に有していた可能性があるかと判断した。なお、天若日子神話における雉が新嘗祭の直前に飛来する構造は、中国文献における「高宗彤日」との類似が見られ、共通点として、雉は天神の使者として下界の不義的な王者を警告する役割を果していると思われる。

終章「王権の正当性をめぐる争いとしての天若日子神話」は、天若日子は原来、アマテラスを崇拝する集団とは別の系統が祭祀していた太陽神である可能性が高く、「天無二日」の原理で、その異種性を抹殺しなければならない。新嘗の直前に、雉を射る事件を通して、新旧の太陽神が、その正当性を争うことを実現した。

今迄の先行論は、天若日子神話の後半に見られる古代葬送儀礼に関する研究が盛んであるが、この神話の中心事件となる「天若日子が矢を逆様に射上げ、天安河の河原にいた天照大御神や高木神の御所に至る」に対する関心はまだ十分ではないと思う。この肝心である返し矢の部分について、最も通説に近い地位を占める「ニムロッドの矢」説も、最近この「ニムロッド」のエピソードは実際に紀元前三世紀以前には存在しなかったと疑問視されたため、再びこの神話に新しい解釈を与える課題が迫られている。

本論は、天若日子神話と羿の神話と比較したところ、文献や考古資料に見える羿が、扶桑樹の上に描かれている鳥を射ようとしている点は、天若日子の神話における「射上げる」行為の理解に示唆を与えられると言える。日本における雉は、中国の陽鳥のように太陽と一体化されてないが、その太陽鳥の神格を有することが見だすことができた。その上、地上界の湯津楓と雉との組み合わせと、高天原の高木神と天照大御神という扶桑樹と太陽の組み合わせは、「対称と倒置」の関係で、天上界と地上界それぞれ二重写しにするものである。そして天若日子が雉を射た矢は天上界に危険がもたされた。そこで、天照大御神の姿が消えていて、返し矢の行為は高木神によることとある。この返し矢により、天若日子という反逆者である新しい太陽神が地上界で射殺された。従って、このような王権争い神話の背景には、古くから射日モチーフが存在した可能性が窺える、と結論づけた。以上の論攷を以て、その他の論述とは異なった新説を提言したいと思う。